

# 鉱物資源情報整備の経緯と現状-アナログからデジタルへ

地図資源環境研究部門 須藤 定久

## 鉱物資源とは

鉱物資源とは、私達が利用する資源のうちで鉱物質のものの総称である。地下資源と呼ばれるものの多くは鉱物資源で、金属(金・銅など)、非金属(石灰石や粘土など)、エネルギー(石炭・石油・ガス)、骨材(砂利や碎石)資源などがある。今回は金属・非金属資源について紹介する。

明治以降、日本近代化の原動力となったのが銅の輸出であり、戦後復興の牽引車の一つは陶磁器(粘土)の輸出であった。このように鉱物資源は近代日本を支えた20世紀の主人公であった(図1)。

## 情報の取得と整備の流れ

戦後、旧地質調査所が中心となり金属・非金属の広域調査が数多く行われ、多くの情報が集積された。1960年代には金属鉱物の基礎探査事業は金属鉱業事業団へと引き継がれた。その後旧地質調査所の研究は、探査の先端を担う学術研究と情報の整備・解析へと特化した。

戦後の調査による資源情報を整理し、新たな探査や学術研究の基礎にしようという試みが1994年に「50万分の1鉱物資源図の刊行・データベース化」のプロジェクトとしてスタートし、1995年北から始まった資源図の刊行も本年度で九州まで進み(図2)、残すは南西諸島のみとなった。

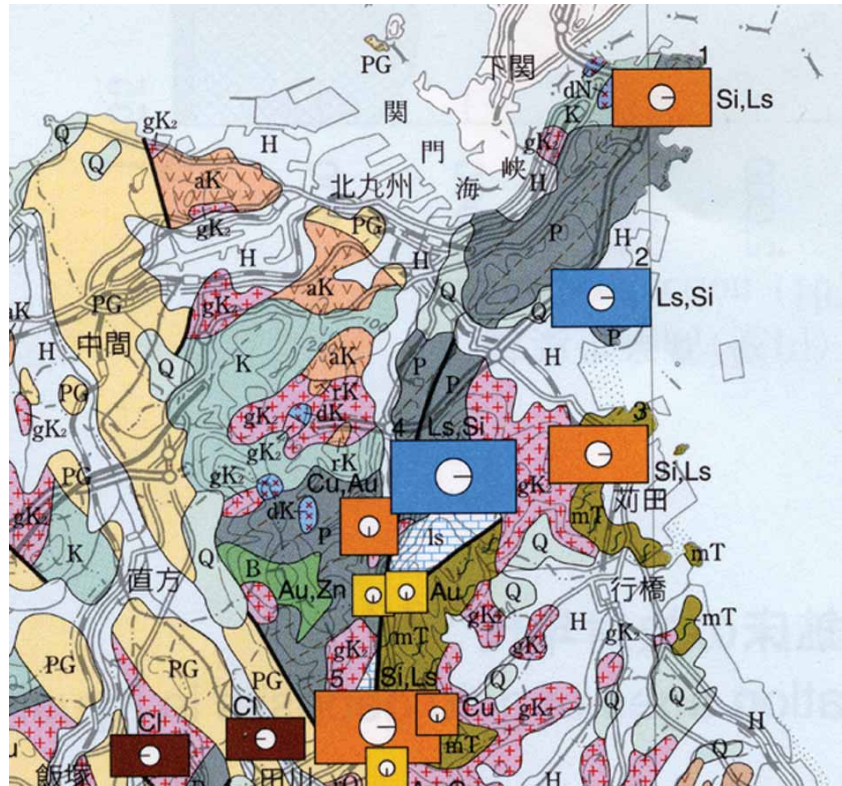


図2 鉱物資源図「九州」の一部。北九州は巨大な鉱業地帯でもある。

## 変わる社会的要請

鉱物資源図の発行は足かけ10年もの年月を要することとなった。この間、経済環境の変化に伴い、鉱物資源の多くは輸入資源となり、国内探鉱の意欲は失われつつあり、アナログからデジタルへと移行を目指す鉱物資源情報への社会的要請も大きく変わってきた。

資源探査のための要請は減少、その一方で国土の保全や国土開発と環

境保全の調和をはかるための基礎資料としての期待が寄せられるようになってきている。例えば、「○○地区でトンネルが建設される。資源図を見ると、昔鉱山があったらしい。詳しい情報は？掘削すると重金属汚染が起こらないか？」といった問い合わせが多くなった。

## 新たな期待に応えて

紙によるアナログ出版からデジタル情報の発信へと進む鉱物資源情報の今後の整備にあたり、社会的要請を踏まえ、①鉱物資源情報の国民への還元(ネットで開発と環境保全の基礎資料を地域や教育現場へわかりやすい情報として配信)、②国際協力への貢献(国際協力によるGIS対応データベースの構築を北東アジアから東南アジアへと広げる)、③詳細情報の整備・活用(鉱物資源情報を基礎に、国土・環境保全にも役立つ情報として整備)を目指す。

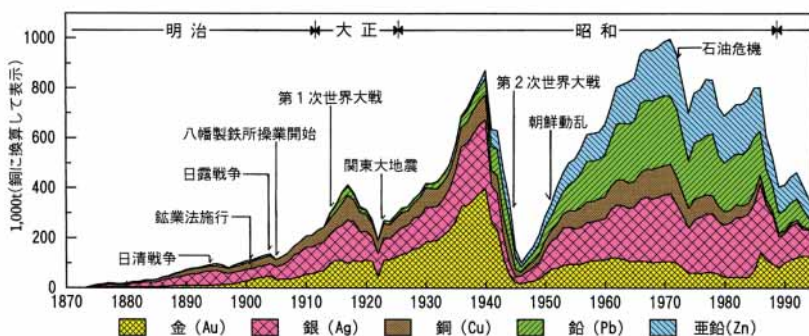


図1 日本の重金属の生産推移。日本の20世紀を象徴的に示している。